

## 答辞

令和7年度 HPS 養成講座 21 クール 加藤陸人

冬の名残を感じる寒さの中にも、少しずつ春の気配を感じる季節となりました。

本日、私たち HPS 養成講座 21 クール生及び週末養成講座 9・10 クール生、22 名で修了式を迎えます。松平先生をはじめとした先生方や、HPS の先輩方、事務局や大学関係者の皆様、本日まで私たちを導き指導してくださった全ての皆様に、一同を代表して心よりお礼申し上げます。

また、このように素晴らしい修了式を開催していただき、誠にありがとうございます。

講座が開講してから半年間、講義や実習、先生や先輩方からの厳しくもあり優しい指導、そして仲間たちとの関わりを通して、私たちは多くのことを学び、大きく成長することができました。

21 クール生は、年齢や住む地域、職種や人生経験も異なる、個性豊かなメンバーでした。初日は緊張と不安でいっぱいでしたが、5 人という少人数の中だからこそ、アットホームな雰囲気生まれ、私たちはすぐに打ち解けることができました。実習中や試験前には互いに励まし合い、支え合っていたことが今でも大切な記憶として残っております。わずか半年という短い期間ではありましたが、切磋琢磨し、認め合い、尊重し合い、励まし合い、信頼できる、かけがえのない宝物となりました。

11 月からは、週末 10 クール生たちとも出会いました。週末組の方々には、21 クール生のことを温かく迎え入れてくれ、実りある対話の機会や、様々な助言をいただきました。心強い仲間が増えたと感じ、とても嬉しく思ったことを今でも覚えています。実習や口頭試問前には、離れていても仲間であるという思いを強く感じておりました。

そんな仲間たちとともに、遊びの持つ力や医療や人をつなぐ HPS の役割、子どもの声を聞く、子どもや遊びから学ぶということなど、人との関わりについて深く考えてまいりました。その一方で、授業や実習を重ねるたびに、本当に HPS になれるのかという不安に押しつぶされそうになることもありました。授業や実習の後、みんなと励まし合いながら、帰った日々を思い出します。

講義や実習の中で、私たちはそれぞれが自分自身の課題に直面し、悩みながらも向き合うことを繰り返してきました。実習を終えても、「できるようになった」という実感以上に新たな課題が見つかり、成長を感じながらも、頭を抱える日々であったことを覚えております。目の前の子どもたちの声を聞き、子どもたちのために私たちに何ができるのかを考え続けること。松平先生からいただいた「言い訳はもういいから、子どもを見つけなさい」

という言葉は、今も強く心に残っております。

子どもは、遊びという接着剤を通して人と関わり、遊びという言葉を通して、学びや治療を自分のものにしていきます。だからこそ、私たちは、子どもたちにとって、「遊びを共にする存在」であるのかを問い続けていく必要があると感じております。

少しだけ、私の実習の話をしてします。実習中、能動的な働きかけが限定的であり、遊びそのもの始まらず展開されない場面に直面しました。待ちすぎてしまうことが課題であった私にとって、それは大きな挑戦であり、心が折れそうになる出来事でもありました。しかし、子どもと関わる中で、挨拶を重ねることや隣にいて手を握ることもまた、大切な関わりであることに気づきました。「何かしてあげなければ」「何か遊ばなくては」と肩に力が入っていたことで、子どもを見ることができていなかったのだと、今では感じております。

肩の力を抜き、子どもにふらっと会いに行く。その積み重ねが、目の前の子どもにとって、「遊びを共にする存在」へとつながり、子どもの声を聞き、見つけていくことにつながるのだと学びました。

また、誠実に向き合い、自ら関わろうとする姿勢を持つこと。曖昧に伝えることではなく、わかったつもりになるのではなく、1人の人として逃げずにコミュニケーションを取ることの大切さも学びました。この半年間は、1人の人間としても大きく成長する時間となりました。

本日、私たちはHPSとして新たな一步を踏み出します。正直、不安と希望の入り混じった気持ちでいっぱいです。それでも、大切な仲間たち、先を歩まれる先輩方、一緒に働く同僚、そして目の前の子どもたちと試行錯誤を重ねて参ります。

「すべてはこどものために すべての子どものために」

この言葉を胸に、これからも一歩ずつ歩んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、修了生を代表し、私たちに関わってくださった全ての方々に、そして同じ時を歩んだ仲間へ、もう一度心から感謝の言葉を申し上げ、答辞とさせていただきます。

令和8年3月27日 修了生代表 加藤陸人